



©Yuki Asada

サイザルバスケットでお買い物

村のマーケットからの帰り道。お母さんたちが手にしている大きな袋には、新鮮な野菜や果物がいっぱい詰まっている。ちょっとやそつとでは破れないお手製のバスケットだ。

ケニアの首都ナイロビから150キロのマクエニでの日常。青年海外協力隊の横山裕司さんが活動するこの街は、乾燥地帯で農業にはあまり適さない。そこで人々の間に広まっているのが、手工芸品作りだった。バスケットもその一つ。使っている素材は、家の軒先に生えているサイザル麻だ。

横山さんは普段使いのこのバスケットに目を付けた。「ひと工夫すれば売り物になるはず!」。現地の女性たちとの挑

戦が始まった。

サイザル麻から繊維を抽出し、一本一本丁寧に編み込んでいく。時にはみんなでおしゃべりしながら、時には水くみや買い物ついでに歩きながら編んでいる。バスケット編みは、彼女たちの生活の一部になっているのだ。

「日本で売るなら、サイズも色も均質にしないとイケないという意識が広がっています。ものづくりに対する姿勢に変化を感じます」と横山さん。見違えるように、「職人」としての意地が見え隠れするようになった。

今はみんなで新しく草木染めの研究をしているところ。カラフルなバスケットを見られる日が楽しみです。



編み物の作業は屋外で。仲間と一緒になら仕事もはかどる

★サイザルバスケットを2人にプレゼント!
→詳細は38ページへ

